

みんなで人権^{じんけん}を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ—人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

私のどら息子・どら娘へ

私の自作の教材集の表紙には「トウ・ディア マイ『ドラサン・ドラドゥター』」と書いている。生徒への英語のメッセージの読み下しである。訳すると、「私の愛するどら息子・どら娘へ」となる。「ドラ」は英語ではない。ドラはいわゆる日本語の「どら息子・どら娘」の「どら」のことである。私にさまざまなことを指摘し、私を教員として育て上げてくれたかわいい子どもたちである。

定年まで担任を続けた私は、子どもや人間が大好きである。50歳からは夜は大学の部落問題論の講師をした。その退職までに、社会科授業や人権学習などの教材や資料を少しずつ自作するようになった。それを生徒が卒業するときに、書家の友人に、筆で素敵なタイトル『魂を授業に』という言葉を書いてもらいとした。心を熱く込めた題名にした。夜なべで印刷し、とじ合わせ、卒業時に全員に配った。その自作資料は大学の講義でも役立った。

自作教材は、30代で教員になって、10年後くらいのとときに、授業や人権学習をしていて自分の言葉の貧しさ、力のなさなどを自覚したので、つくり始めた。教育の最大の商売道具は言葉であるから、どうしたら自分の言葉が子どもたちの心に届くようになるのかと試行錯誤した。言葉は、素晴らしく、かつ

厳しい。

人権学習や平和学習だけではなく、日々の授業の中で私の言葉がどれだけ子どもたちに届いているのかと不安になる。子どもたちの心をレントゲンのように映すことはできない。しかし私には確かに、先達の言葉がふに落ちた記憶がある。気づけばふに落ちている言葉。そんな言葉を、私も自分から発することができるか悩み、めまぐるしい教育現場の中で走り続けながら、せめて1年に1回は自作教材を作ろうと努力してきた。子どもたちはその自作教材集を受け取ると必ず「どら」とは何かと聞いてきた。「あなたたちのことだよ」と答えると、皆怒り、笑った。

昭和47年に、賤(せん)称語を含む部落問題が教科書に記載されてから50年あまりが過ぎた。その記載を巡り、賛否両論の激論が交わされた。しかし、現場では差別的な発言が多々起こった。そこには言葉で傷つけた子と、言葉で深く傷つけられた子がいる。そのとき、私は差別発言した子と同じ立ち位置(差別する側)に立って、その子とともに、差別発言をされた方(部落問題そのもの)に向かって学び続けてきた。これが、差別事件の教育としての最低の取り組みである。差別した子とされた子とともに抱えて、学び続ける。ともに、大好きなどら息子、どら娘たちなのだから。

図 教育政策課

差別発言の報告時に

教育委員会は、各校から差別発言の報告を受けています。ケンカの中で、相手をより傷つける言葉として差別語を使ったり、ときには病名を相手に投げかけたりすることも報告されます。

報告時には、差別発言を学校としてどうとらえているかも尋ねます。また、何が差別発言をさせてしまったか、例えば、人間関係、今までの指導のあり方なども一緒に考えます。

言葉は、人の気持ちを明るくもし、「言刃」となって人を傷つけもします。デジタル社会の中、画面に映る言葉だけでなく、人の感情も気持ちも伴って発せられる生の言葉を大切に、安心して過ごせる学校づくりが行われています。

筑紫野市人権尊重の
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、
言われたりして、
いやなことは
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。